

キヤンバスアジアプログラム
東北訪問新聞

キャンパスアジアプログラム

発行日

2013年11月1日
編集長：吉積皓平

防災庁舎を
訪ずれて

8月1日、宮城県南三陸町にある防災対策庁舎を訪れた。東日本大震災の津波で骨組みだけが残り、津波の猛威を伝える震災遺構（震災の記憶を遺す構造物）となった本庁舎に多くの人々が足を運んでいた。実物の庁舎を目前とした時の心境は、決して容易には語り得ないものがある。被害規模については立命館大学で講義を受け予め知っていたが、庁舎を前にした時は日中韓学生の全員が自然と沈黙した。慰霊のために手を合わせる人が献花台の前にならび、被災地ボランティアの津波の体験を熱心に耳を傾ける様子が印象的であった。庁舎を前にした時の気持ちを韓国人学生のメン・ハンジェ君はこう語る。「実物を目にして悲しみがあふれ、いて

7月31日	夕方 京都を出発
8月1日	早朝 石巻到着 午前 戸倉中学校、南三陸町さんさん商店街 午後 跡などを見学。学生意見交換会
8月2日	午前 石巻市雲雀野地区、門脇小学校、日和山を見学 午後 市民による講演、雄勝町にて避難所運営体験ゲーム
8月3日	午前 大船渡市へ移動 午後 大船渡市市役所にて行政職員による講演。 学生意見交換会。
8月4日	早朝 大船渡市を出発。夜、京都に到着

で、した
が、私た
ちは被災
地の現状
を自分の
目で見て
感じ、大
切なこと
を多く教
わりまし
た。地震
の恐ろし
さや復興
の厳しい
現状も知
りました
が、それ
以上に被災
地の

本誌は、宮城県で協力いただいた復興ボランティア団体や大船渡市役所の皆様のご協力により作成することができました。本当にありがとうございました。

(外山未祐)

被災地を思いながら。

中国人学生ファンファオ

本活動で地元の方の話を聞いた
り、現地で被災地の現状や大船渡
市の夏祭りの様子を見たりして胸
がいつぱいになりました。研修最
後日、立根地区公民館でミーティ
ングが行われました。日中韓の学
生が今回の活動で感じた事を思い
思いに話し合いました。東北に来
る以前、新聞やネットの情報だけ
に頼っていた私は、復旧は大体終
わっていると思っていましたが現
地の現状はその考えをすぐ打ち消
しました。被災地ガイドさんの話
を聞いていると、津波が目の前ま
で迫ってくるようでした。私たち
は一体東北の人々のために何がで
きるのか、言葉を詰まらせ涙を
こらえきれない学生もいました。
私は08年に発生した四川汶川大
震災を思い出しました。

東北で知ったもの。

韓国学生キム・ソンミン

東北研修の最終日、自分たちはこの3日間で感じた事を話しました。直接、町の被災者に話を伺ったという学生や、話している途中に涙を流した学生もいました。「自分たちに何ができるのか」と考えた時、「伝える事」だと思つた。2年経つた今現在の状況を、そこに住む人の思いを知る人は多くないと思つたからです。実際、自分もそうでした。行かないと分からない事を直接行ってやつと分かるものがある。東北の事は知っていたけど、どんな状況下であるかは知りませんでした。東北で出会つた人はみな「忘れられる事が一番怖い」と言いました。そうです。忘れない限り東

北への支援もボランティアもきつとなくならない。そして、自分の目で見たこの震災の苦しさをものと他の、ここ東北に出来ない人に伝える事が自分にできる事だと感じました。

も立つても居られず手を
合わせました」庁舎を前
にしての学生の表情は一
様に硬かったが、建物の
裏側に回ったり写真を

どう後世に伝えるのか、今後の課題として残される。跡地は震災記録施設として利用される予定である。

(坂下祥太郎)

東北訪問から

二ヶ月が経つて

あれから2カ月が経った9月下旬、南三陸町は同庁舎の保存を断念する意向を固めた。11月にも解体が始まる。解体撤去した後、被災の現実感を感じた。

東北被災地訪問から約3カ月が経ち、私たちは今韓国にいます。今でもふとした時に東北を振り返り、ガイドの方々や市長の貴重な話を思い出します。それぐらい災地研修は私たちの心に染みましました。5日間の短い研修

東北に負けない気持ち。

日本人学生 近藤健一

震災当時、私は名古屋におりました。ニュースを見ていると被害がみるみる拡大していった事に驚きを隠せませんでした。私も「自分に何ができるのか」と思ったことがありました。ニュースが減るにつれ東北を考える事が少なくなりました。今回、初めて被災地を訪れました。被災者の方が自らガイドになり震災時の様子を話して下さいました。今まで見て聞いて知っていた事とは違い、顔の表情と生の声を通したためか心に届きました。今までではなんというか脳に届いていたって感じです。山を登り、津波から逃がれ、家族の連絡を待った人が揺れるバスにしっかりと立ち、マイクを握る姿は強く見え、ひとつひとつの言葉が肌沁みこんでくるようでした。

本活動を通じ思った事、それは東北の人に負けないよう自分のすべき事を全うする事と感じました。そして東北の事を考え続けること。こんな風に思う人が多くなれば多くなるほど、きっと東北だけでなく、どんな国の未来も可能性が広がるのではないかと思えたりしています。私たちが見た被災地の今。少しでも多く国内外に伝えられる事ができればと思います。



fluctuat nec mergitur

～揺れるが没することはない～

김준엽 キム・ジュニョブ

8月4日、私は石巻市で催している祭りに参加した。韓国人である私にとっては、日本の祭りは興味がある文化の一つだった。まだ復興しきれていない地震被災地で、被災者たちと楽しく祭りに参加することができるかと疑問に感じていたことも確かである。しかし、祭りに参加した後で私の心配は杞憂だったと気づいた。町の人や観光客、ボランティアが共に、楽しんでおり、悲劇的な出来事乗り越えたいという人々の意思を感じることもできた。祭りの目玉はボランティアと市職員、町の人たちが一緒に町を闊歩する盆踊りだった。楽しく踊る人たちを見ながら、私の心も一緒に楽しくなり、同時に胸が熱くなった。祭りが終わって帰る途中に、私は彼らのように強い心を持っていてるだろうかと思っただ。その瞬間、彼らのように人生に感謝しながら、痛みを耐え抜くことを知っている強い人になりたいと思った。フランス語にはこんな言葉がある。

“fluctuat nec mergitur”

直訳すれば揺れるが没することはないという意味である。被災地の人たちこそ、この言葉が最も似合う人たちではないかと思う。これから残っている復興過程が無事に終わることを祈りながら、また来年には、もっと幸せな顔で祭りに参加する彼らを見たい。

地域行政職員の立場から見る

被災地訪問3日目、大船渡市役所にて、お話を伺う事ができた。災害時において行政側は迅速かつ適切な対応が求められる。津波の被害で通信網が途絶えるという大変苦しい状況下で他地域との連絡、物資の確保、更には数年規模で実施される復興計画の作成・実施など休む暇なく災害復旧に努めなければならぬ。その精一杯の努力にも関わらず住民からの行政当局に対する不満は絶えない。それだけでもストレスは積み重なり心身共に疲労が蓄積されていくが、さらに心を痛めるのは個人として復旧作業ができない点だ。たとえ自宅が流されようと家族が行方不明になろうとそれを理由に公務を離れることができない。家族を優先して助けることができないため、家族から見捨てられたと批難を受けることすらあるという。多くの人がいわゆる行政批判を耳にしたことがあるだろう。行政の

避難経路を

実際に体験して

8月2日、石巻市の被災地を訪れた。津波に流された街並み、未だ積まれたままの廃車、倒れた墓石。津波の高さは想像をはるかに超えるものだった。津波襲来時に多くの人々が逃げ込んだ日和山の神社へと続く百段は、息を切らしながら登った。避難路となったその階段は、子供からお年寄りまで登ったとは思えないほど段差がきつかった。頂上で町を見つめた時の気持ちはどうだったのか。津波に流されていく町を想像してただただ心が痛くなった。

在日外国人の被災者

私は石巻市にある工場で働くふたりの女性に会う事ができた。ひとりには中学校に通う息子を持つ日本人女性である。震災後、避難所で感じたやるせないから、後にボランティア団体を通して、パンフレット『石巻に恋しちゃった』を発行し、町の復興活動に役立てている。

不手際が報道され、それに対して否定的感情を持ち、その批判に同調した方も多いのではないかと。しかし、忘れてはならないのは、行政に携わる人々もひとり人間であり、自分自身も被災者のひとりであるということだ。被災した一般の民間人が混乱し、心に大きな傷を負ったように、行政側もぎりぎりの精神状態で疲労が蓄積した体で全力で対応していることは知っておかなくてはならない。自らの一番大切なものすら犠牲にする覚悟で活動しているのだ。彼らは視点によっては民間人よりも大きな心の傷を負っていて、よりつらい立場に立つ人々と言えるのだ。もちろん、彼らの立場を擁護ばかりはできない。しかし、今回の講演を聞いて今まで見えなかった立場の人々の意見を聞くことができた。まだまだピックアップされていない様々な立場に立つ人々の思いがあるはずである。

(吉積皓平)

もうひとり、一児の母である中国女性。当時の様子をゆっくりと話し始めた。でも、日本語の分からない中国人が津波警報を理解できずに逃げ遅れた事があった。大きな傷を抱えた畢麗君さんは本気で中国に帰りたいと考えた。しかし娘に日本にいたいとせがまれ留まる事を決意したという。震災後、まだまだ雪が降るほど冷え込む3月の石巻に来てくれたボランティアの暖かい心が忘れられない。私は娘と日本の心と一緒に生きていく。そう気づいた時、心にかかっていた雪がぱっと晴れた気持ちになったという。異国で大地震の恐怖を体験しそのまま現地に残る事は容易ではなかったはずだ。今後は日本で働く中国人の支えになりたいという。ふたりは、ここまで来られた原動力を「家族の存在」だと言い切る。当たり前の存在が大きなパワーになる。私は震災を通して大切なものが見つけたのか。

(丸山紗代)